



天から授かった「龍の瞳」 が稲作を変える！

時論

水稻「龍の瞳」育成者

今井 隆

二〇〇〇年九月、秋晴れの昼下がりである。

私は「コシヒカリ」が植えられた二坪の棚田で、背がとも高くて巨大な籾をつけた数本の変異籾に出合った。興味に駆られた私はその後、試験栽培を行い、〇六年に「いのちの芯」という名前で品種登録することができた。

こちらの方が有名になっているが、「龍の瞳」という商標を取得して流通させている。

龍の瞳の特徴は、コシヒカリの一・五倍の大きさと甘み、香りがよく、官能検査での食味値が高いことで、「あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト」では昨年、一昨年と二年連続して日本一に輝いた。多くの米コンテストでの上位入賞は、マスコミなどに注目され、また、地元・下呂温泉の高級旅館などを通して全国に発信、幻の良食味米として知られるようになってきた。

龍の瞳は、(資) 龍の瞳と契約農家さんとの間で、通常の三分一以下の低農薬、低化学肥料で栽培され、品種そのものが、山・川の再生というコンセプトを持っている。「NPO法人 龍の瞳倶楽部」も発足して、混交林の森作り、食農教育、産業観光としての農業なども見据えての活動を行うことにしている。米は、生産段階では化学肥料の多投と農薬漬けで、流通段階でも過度な精米で味を落としている。米の消費拡大の前提は、本当に美味しいお米を作ることだと思ふ。

国民が一食で一口たくさん食べるだけで、

軽く一〇〇万の米消費が生まれる。

龍の瞳を使っていただいたいの旅館さんの話では、お客様のお米の消費量が一・五倍になったという。おいしいことに加えてかなりの多収穫を狙え、まさに「夢の米」が天から降ってきたのである。種の原因種は(資) 龍の瞳が管理しているのだが、自然に優しい農法で山・川の再生というコンセプトを大切にしながら、慎重にかつ大胆に広げていく具体的な方法を模索しているところである。

生産者は米価の低迷に喘いでいる。流通業者も利益が確保できず、廃業が後をたたない。消費者は、食べ物の安全性におののいている。価値の基準が、このところ揺らいでいる。お金をあの世に一銭たりとも持っていけないということに、多くの人は想いをめぐらさない。多様な生物が息できる環境づくりこそが、人類の滅亡を回避する近道なのである。龍の瞳を通した「実験」は緒に就いたばかりではあるが、「龍の瞳が日本を変える」という意気込みでがんばりたいと思ふ。

いまい・たかし 一九五五年、岐阜県生まれ。七四年に農林省入省。二〇〇〇年九月に「龍の瞳」との出合いを経て、五一歳で同省を退職、「龍の瞳」の普及と山・川の再生事業に取り組んでいる。小説、詩、ルポなど幅広い創作活動を行い、文芸同人誌「麦夢」を主宰。「NPO法人 龍の瞳倶楽部」理事長。現在は、(資) 龍の瞳の社員。